

「男女共同参画会議2007いわき」を開催

未来を共有して

男女共同参画週間に合わせ、6月24日(日)に「男女共同参画会議2007いわき」を市総合保健福祉センター多目的ホールで開催しました。ノンフィクション作家 加藤 仁さんの基調講演と福島県立医科大学非常勤講師の後藤宣代さんをコーディネーターに、3人のパネリストを迎えて「チャレンジ～個性と能力を発揮して～」をテーマにシンポジウムを行いました。

基調講演要旨

男性の地域デビュー

「動いて やって 見つけた私のさがしもの」

私は33歳から27年間、定年退職された方々の話を伺ってきました。定年後は個人としての底力が問われ、その人なりのオリジナリティが出てきます。また、数多くの介護施設も訪問し、お年寄りや介護スタッフの方々の話を聞いています。そこから私自身が学んだことをお話しして、皆さんが少しでも元気になっていただければと思います。

いろいろな出会で教えられましたが、人間は居場所が2つ必要ではないかと思います。プライベートな私的な場所と公的な場所です。歳をとってくると、放っといてくれ、私一人にしてくれと



加藤 仁 (かとう ひとし) ノンフィクション作家

1947年名古屋生まれ。1972年早稲田大学政治経済学部卒業。1973年、在学中より勤務していた出版社を辞め、ノンフィクション作家として独立。以来、人物論、ドキュメント、ルポルタージュなどを手がけ、生活者の視点から一人ひとりに会い、取材執筆活動を続けている。長時間の取材をした定年退職者だけでも3000人以上にのぼる。

著書に『定年後の居場所を創る 背広を脱いだ62人の実践ファイル』(中央公論新社)『定年後をパソコンと暮らす』(文春新書)『定年後』(岩波新書)『介護の「質」に挑む人びと』(中央法規出版)等多数。

いう気持ちと寂しいという気持ちの相反する気持ちが生じます。人間は両方あるのが当然です。この2つの場所で1つが確保されていると、もう一方の活動も盛んになっていきます。プライベートな空間が確保されて初めて、公的な地域活動等が出てきます。そして大切なことは、まず何かを動いてやってみることだと思います。

地域デビューという言葉はあまり好きではありません。自分が言われても気恥ずかしい思いがします。もっと自然体で、地域の中でできることをしている方々をご紹介します。

愛知県在住の定年1年前の男性です。犬の散歩に行く河川敷のゴミが気になり、どうすれば捨てられないかを考えました。そこにひまわりの種を植えようと、近所の子供も達や地域の人を集めてイベントのようにやりました。そしてできた種を欲しい人にあげましようとしてインターネットで呼びかけ、全国5000人以上の人に分けました。このように自分が住んでいる地域のために何かしたいという思いで、できることをやっていくのが楽しいと思います。

群馬県の団塊世代の同級生達は、商店街のシャッター通りを活性化しています。お年寄りが立ち寄れる喫茶店を開き、いろいろな人からの相談にのったりしています。同級生の良い点は異業種の人たちが集まることです。同級生で活動するとき気をつけたいのは、過去の共有を越えて、自分たちの活動がどこまで未来を共有しているかという点です。過去だけを共有していると広がらないですが、未来を共有しているという視点があると、いろいろな世代の人に広がります。ですから皆さんも、自分たちのやっている活動が未来を共有しているか気にしていただきたいと思います。